様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　７ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ００３０６

研究課題名（和文）日本中世文化における漢画系画題に関する総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive Study on Chinese Painting Titles in Japanese Medieval Culture

研究代表者
中本　大（NAKAMOTO, Dai）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：７０２７３５５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究課題における最大の成果は、東京文化財研究所蔵、「常信縮図」写真版の全画題分析を実施したことである。画題分析は「故事・人物図」、とくに漢画系人物・道釈画題について重点的かつ詳細に行い、その結果を一覧データ化した。今後は分析したデータに基づく特長的な個別画題の研究を継続的に進める予定である。
　個別画題の分析については、室町時代中期の文明年間、相国寺の学僧・彦龍周興の周辺で受容された中国宋代の文人、陸游に関わる詩題および画題「扇市図」の研究・「馬蝗絆」の銘をもつ青磁茶碗が東山文化の神髄として評価される要因に関する研究・本邦五山禅林における宋代の文人、蘇軾の人物像に関わる研究などを遂行した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　「日本人が受容した漢画系画題」という切り口は、実に多くの示唆を与えてくれる。最も重要なのは、日本人が漢画から何を読み取り、その背景となる故事・逸話や物語、歴史的背景をどのように理解したかを端的に指し示す素材だということである。典拠との距離感、すなわち何を正しく理解し、何を誤って解釈し、何を受容しなかった、その差こそが、「日本的」なものの見方や考え方を追究する有効な契機になると考えられる。「画題」に注目した本研究はまさに日本文学の特質や本質を解き明かそうとする試みであり、それが時代を経て変遷するものだったのか、それとも不変であるのかを、個別画題の研究を通して解明し得たのではないかと考えている。

研究成果の概要（英文）：The greatest achievement of this research project was the comprehensive analysis of all themes from the "Tsunenobu Shukuzu(常信縮図)" , held at the Tokyo National Research Institute for Cultural Properties. This thematic analysis focused in detail on "Historical and Figure Paintings," particularly on Chinese-style figure paintings, and the results were compiled into a list of data. Moving forward, we plan to continue researching distinctive individual themes based on the analyzed data.
Regarding the analysis of individual themes, studies were conducted on various topics during the Muromachi period around Genryu Shukou of Shokoku-ji Temple. These included research on poetic and pictorial themes related to the Song dynasty literatus Lu You, known as "扇市図," studies on the evaluation factors of a celadon tea bowl inscribed with "馬蝗絆" as the essence of Higashiyama culture, and research on the portrayal of the Song dynasty literatus Su Shi within the Zen monasteries of Japan's 五山禅林.

研究分野：日本中世文学、漢文学、五山禅林文学

キーワード：画題研究　漢画系画題　五山禅林文学　常信縮図　蘇軾　陸游　馬蝗絆　彦龍周興

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究課題である「日本中世文化における漢画系画題に関する総合的研究」では、狩野派を中心とする粉本類（画家や絵師が後日の制作・研究に備えた絵画作品の写し、絵画の下書きや本格的な模写なども含む）の調査を行うことが第一の目的であった。具体的には、東京文化財研究所に所蔵される、河野元昭氏が代表を務められた 1998 年度から 2001 年度におよぶ科研費研究課題「探幽縮図の総合的研究」(基盤研究 A 課題番号 10301004)で撮影された「常信縮図」写真版の全画題分析を実施、終了したことである。画題分析は「故事・人物図」、とくに漢画系人物画題について重点的かつ詳細に行い、その結果を一覧し、データ化することを企図していた。その学術的背景は、「画題」を端緒とする種々の問題提起が、文学研究、就中、文献テキストの研究にも資することを検証することであった。

本邦室町時代禅林で愛好された水墨画の題材である中国の花鳥山水や故事人物などに取材した漢画系画題は、大和絵や仏画などと同様に、現存作例を解析、研究する契機の一つとして日本・東洋美術史研究で、副次的ではあるものの、さかんに活用されてきた。しかし更なる研究上の位置付けは不十分で、重要な文化的資源が有効利用されていないと認識していた。すなわち、五山僧が実際に目にしていた絵画作品からもたらされた情報の収集と分析、更にはその情報に基づいて作成された詩文や能楽などの「二次創作」などの解明などは、美術史研究の手法によるアプローチでは限界がある。他方、文学研究においても、その重要性が看過されているのが現状だったからである。しかも問題はそれにのみ留まるものでは無かった。室町時代五山禅僧の手による詩文集に数多く見出せる題画詩や画賛には、現存しない絵画作例を着賛の対象にしたと考えられる詩文が数多く存在しているのである。

近年、文学研究者の画題へのアプローチは活況を呈しつつあると認識している。そして、その先鞭を付けたのが私の問題意識と研究成果であったと自負している。夙に狩野一渓編の漢画系画題辞典の嚆矢と言うべき『後素集』に注目し、数多くの禅林における題画詩を通覧し、考察してきた。それらの成果は、本学の 21 世紀 COE プログラムや各種科研費、更には「東アジアの海域交流と日本伝統文化の形成－寧波を焦点とする学際的創生－」、いわゆる「にんぷろ」などでも広く提起し、様々な機会で、種々の個別的具体的問題について検討を続けてきた。それが本研究課題を設定した背景であった。

さらに、私の問題意識の一つが、漢画系画題における中国と日本との認識の「差異」であった。それらは、

(1)「誤解」によって生みだされたのか
(2)受容者の意図的な「ずらし」や「解釈」を経て定着したのか
(3)全く理解・共感できなかった結果、受容すらされなかったのか
(4)正確に理解した上で享受したのか

などに分類されると考えられるが、それらを丁寧に検証、分析することで、「誤解」や「ずらし」・「解釈」を生み出した本邦五山禅林文学の独自性や特異性を解明することも研究上の主要な目的であった。この問題意識は現在も継続しており、これこそが本研究課題の核心をなす本質的な「問い」でもあった。

２．研究の目的

本研究の目的は、画題に関する詳細な検証を通じて、室町時代を中心とする五山禅林文学における特質を明らかにすることであった。たとえば、室町時代五山学僧の詩文集に見える題画詩には、絵画作例が現存しないと考えられる画題も多く存在している。それは単に、かつては絵画作品として実在していたものの、戦禍や火災などで失われて、現代の我々が鑑賞することのできないものだけでなく、そもそも絵画作品として残されなかった「架空」の画題も存在していると考えられるのである。五山学僧の重要な役割の一つとして、将軍や幕府権力者、親交のある公卿らの依頼に応じて、絵画作品のために画賛を作成することがあった。そうして生み出された画賛の表現や措辞は、絵画作品の構図や場面、アトリビュート（象徴的付属物）などを類推する重要な手掛かりともなっているのだが、実際は、絵画作品の存在を前提としない画賛詩も作成されていた可能性もあるのである。たとえば豊臣家の御用絵師であった狩野一渓が編纂した画題の一覧集成とも言うべき『後素集』は、注文主の要望に応えるための見本帳（カタログ）としての役割もあったと想定し得るが、室町時代の五山禅林においても、有力武家等パトロンの要望に応じて画賛を作成するため、架空の画題を選定し、実際に詩作するという禅林文壇独自の教育が積極的に行われていた可能性を想定できるのである。そしてそれは教育的修練にとどまることなく、詩文作成能力を向上させる優れた取り組みとして、五山禅林文壇で評価、共有されるに至ったのではないかと考えている。こうした観点、すなわち、絵画をともなうことのない架空の「画題」を設定して、それを文字化させるという営みは、文字テキストを中心とする文学と絵画表象の交感や相関関係を考える上で、これまで想定されていなかった重要な示唆を与えるものだと思われる。本研究課題では、そうした画題の具体例のいくつかを

示すことも目的としていた。その成果は、今後、こうした画題が詩題として課されたと考えられる禅林詩会の実態解明などを通じて、これら「架空の画題」が生み出されるメカニズムについて検討することにも繋がると考えている。

室町時代の禅僧はこうした架空の画題に基づく題画詩の作成を通して、何を学び、新たに何を生み出そうとしていたのかを解き明かす――こうした視点に基づく総合的な研究は文学・美術双方の領域において、これまでにない問題意識であった。本研究課題独自の着眼点でもあると考えている。そもそも禅林には明兆・如拙・周文・雪舟ら「画僧」と呼ばれる禅僧もおり、文名を轟かせた学僧とも差別されることなく画業に励んでいた。多くの絵画作品は実際の法会や儀礼でも荘厳として用いられ、それによって新たな価値が付与される事例もあったと考えられる。五山禅林における絵画と文学の深い関係性を解明する研究は、室町時代の文化的特質を考える上で、重要な契機となったと考えている。

３．研究の方法

本研究課題では、主として狩野派の絵師による粉本の分析を通じて、禅僧の題画詩は単に描かれた画面を精確に再現するだけでなく、画題そのものの文化的背景や歴史的評価、さらには描かれたヒトやモノ（事物）をどのように文字表現しようとしてきたのか、を徹底的に検証するという手法を試みた。その上で、重要な仮説として、そうした画題詩や画賛作成が、いわゆる**文学的常套表現を生み出す契機**となっていることを掲げ、慎重に検証したいと考えた。この問題意識は、本研究課題の進捗にともなって醸成されたものでもあった。たとえば「扇市図」という中国の年中行事に取材した題画詩が、一見、その画題とは何の繋がりのない南宋の詩人・陸游と結び付けられて理解されるようになる、という文学的回路を文壇に定着させる、という例がある。類似の事例は他の画題においても辿り得るのでは、とも予測され、日本における中国文学受容の一つの典型として位置付けることも可能なのではないかと考えられる。本研究課題の最大の成果は、こうした事例を紹介するだけでなく、本邦禅林の文化的特長として、一定整理するところまで繋げることであった。「扇市」も絵画作例の存在しない架空の画題だと推定したのだが、逆に具体的な構図やアトリビュート（絵画における象徴的付属物。それによって人物や風景の特定に資するもの）から自由になることで、文学活動や生み出された作品そのものにどのような効果をもたらすのかについて、考察できたと考えている。そうした架空の画題が選定され、教育的配慮のなかで詩文が生み出された空間こそが禅林で頻繁に催された詩会（禅林詩会）という場であったと想定している。「場」の分析も非常に重要であると認識している。

具体的な方法および成果としては、禅僧の別集や総集、詩会資料などに見える題画詩を分析することで、禅林詩会において、題画詩が出題される意味・意義を検討、解明することから着手した。「扇市」研究で注目したのは相国寺の学僧で、夭折した彦龍周興の別集『半陶文集』であった。あわせて彦龍にも影響を与えたと考えられる江西龍派・瑞渓周鳳・景徐周麟など五山学僧の詩文集を取り上げ、本詩題および画題理解には本邦における陸游詩受容の問題の解明が不可欠であることを探り得たのは、実に有益であった。

４．研究成果

【論文】

「「和」と「漢」のはざま―連歌における漢詩文受容の一側面―」(「論究日本文学」113・立命館大学日本文学会・2020・1～14)

「二次創作された東山文化の「和漢」 ―享保年間の「馬蝗絆」をめぐって―」(『茶の湯再考』・筑摩書房・2022)

「五山禅林の学僧が見据えていたもの―日本文学史における五山文学の独自性―」(『日本漢籍受容史論考 日本文化の基層』・八木書店・2022・346～354)

「相国寺山内プロジェクトとしての『名庸集』」(『書物学』22・勉誠社・2023・13～16)

「「扇市」攷―本邦禅林における陸游詩受容を中心に―」(『日本古典文学の言葉と思想』・武蔵野書院・2024・)

【講演】

「五山文学の底力―理想的な「文人」としての本邦五山禅僧」(相国寺承天閣美術館「禅寺の学問―継承される五山文学」展記念講演・2021/11/27 於・相国寺承天閣美術館)

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 中本　大	４．巻 22
２．論文標題 相国寺山内プロジェクトとしての『名庸集』	５．発行年 2023年
３．雑誌名 書物学	６．最初と最後の頁 13-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中本　大	４．巻 -
２．論文標題 五山禅林の学僧が見据えていたもの――日本文学史における五山文学の独自性――	５．発行年 2022年
３．雑誌名 日本漢籍受容史　日本文化の基層	６．最初と最後の頁 346-354
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中本　大	４．巻 -
２．論文標題 二次創作された東山文化の「和漢」―享保年間の「馬蝗絆」をめぐって	５．発行年 2022年
３．雑誌名 茶の湯の歴史を問い直す―創られた伝説から真実へ	６．最初と最後の頁 245-272
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中本　大	４．巻 －
２．論文標題 二次創作された東山文化の「和漢」 ―享保年間の「馬蝗絆」をめぐって―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 茶の湯再考	６．最初と最後の頁 －
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中本　大	4．巻 —
2．論文標題 五山禅林の学僧が見据えていたもの——日本文学史における五山文学の独自性——	5．発行年 2022年
3．雑誌名 日本漢籍受容史論考	6．最初と最後の頁 —
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

1．著者名 中本　大	4．巻 113
2．論文標題 「和」と「漢」のはざま―連歌における漢詩文受容の一側面―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 論究日本文学	6．最初と最後の頁 1～14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 —

1．著者名 中本　大	4．巻 -
2．論文標題 「扇市」攷―本邦禅林における陸游詩受容を中心に―	5．発行年 2024年
3．雑誌名 日本古典文学の言葉と思想	6．最初と最後の頁 397～415
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 —

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

—

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関